

日本放射線安全管理学会 第12回学術大会 札幌 印象記

土居 亮介
Doi Ryosuke

今回で12回目となる日本放射線安全管理学会第12回学術大会が平成25年11月27日(水)～29日(金)の3日間、北海道大学学術交流会館(札幌市)にて行われた(写真1)。北海道大学は札幌駅から徒歩10分と大都市札幌の中心部にありながら、ポプラ並木、モデルバーンなどの観光名所も多く、大会の合間に観光も楽しめるような好立地での開催であった。

初日は大会長の関興一氏(北海道大学)による開会の挨拶で始まり、2題の招待講演とシンポジウムが一般公開で行われた。招待講演1はFilip Vanhavere氏(ベルギー原子力研究センター)から「The renewed attention for eye lens doses to occupationally exposed workers」というタイトルで水晶体等価線量限度の再評価に関する講演がなされた。ICRPから水晶体等価線量の新たな線量限度値が示されたのは周知のことであるが、その背景から新たな線量限度値が示されるまでの経緯などについて説明された。招待講演2はAnatoly B. Rosenfeld氏(ウーロンゴン大

学)による「Progress in radiation dosimetry with semiconductor sensors」であり、半導体センサーを用いた線量測定に関する最新の知見について紹介があった。いずれも海外の著名な先生の講演とあって、活発な議論が交わされていた。

シンポジウム「福島への復興に向けた放射性廃棄物処分の課題」では最初に基調講演として佐藤正知氏(福島高等工業専門学校)が「放射性廃棄物管理の技術的課題」と題して、福島第一原子力発電所事故由来の放射性廃棄物について敷地内、敷地外それぞれにおける現状と課題について広く話題提供があった。その後、4名のシンポジストによる講演があり、幌延町(北海道)における深地層研究に関する現状の報告(藤田朝雄氏(日本原子力研究開発機構, 以下JAEA)), 福島原発事故由来の廃棄物とその処理・処分システムに関する研究の進展状況(池田泰久氏(東京工業大学)), 廃棄物中の放射性セシウムの化学的挙動を明らかにするための微生物学的研究(大貫敏彦氏(JAEA)), 中間貯蔵及び最終処分の安全評価に向けての現状報告(武田聖司氏(JAEA))とそれぞれボリュームのある内容であった。そのためディスカッションの時間が余り取れなかったのは残念であったが、放射性廃棄物の問題は長期的に考えていかなければならない課題であり、現時点での知見を網羅したこのシンポジウムは非常に有意義なものであった。

2日目は総会、学会賞の表彰式から始まり、一般演題とポスターセッションの後、2題の特別講演が行われた。特別講演1は「放射線障害



写真1 雪景色の大会会場

防止法関係の最近の動向について」と題し、南山力生氏（原子力規制庁放射線対策・保障措置課）から原子力規制委員会への所掌事務の変更と法令改正に伴う放射化物の管理について説明がなされ、管理者には原子力行政の現状を知る良い機会となった。続く特別講演2は玉木長良氏（北海道大学）による「核医学診断（PET検査）の有効性」についての講演であった。核医学診断の基礎から最新のトピックスまで、ユーモアを交えたスライドで分野外の聴衆にも非常に分かりやすい内容であり、特に核医学検査を中心とした様々な治療、診断への新しい応用例の紹介は今後のPET検査の発展を予見させるようであった。

2日目の全講演終了後には、アスペンホテルに場所を移して懇親会が行われたが、実行委員会の予想をはるかに上回る134名の参加者が集まり、アカデミックな議論もあれば会員同士の親交を深めあったりと、それぞれが学会の合間の一時を楽しんでいた。

最終日は原発由来放射性物質に関する調査・対策委員会報告が行われた。報告内容は楢木中の放射セシウムの分布についての報告（北実氏（鳥取大学））、着用したマスクに付着した放射性セシウムの解析についての報告（松垣正吾氏（東京大学））、稲の放射性セシウムの吸収についての研究結果報告（中島覚氏（広島大学））、自治体支援の取り組みについての報告（佐瀬卓也氏（放射線環境・安全カウンスル））、イメージングプレートを用いた放射性物質の化学形態に関する研究報告（末木啓介氏（筑波大学））、初期内部被ばく線量再構築の現況についての報告（松田尚樹氏（長崎大学））の6つであり、いずれも福島県の復興には欠かせない対策・問題についての報告であった。当学会は原発事故直後から本委員会の前身となる放射性ヨウ素・セシウム安全対策アドホック委員会を組織し、精力的に活動しており、それを示すような広範囲にわたった内容であった。この委員会以外にも多くの学会員が自治体支援、除染、測定等、様々な形で原発事故後の放射線対策に関わっていることもあって、フロアからの質疑応答も多

く、関心の高さがうかがえた。午後からは特別講演3として田中聡氏（環境科学技術研究所）の「低線量率放射線の長期照射が生体に与える影響」、馬場護氏（東北大学）の「J-PARC事故の経緯と教訓」という2つの講演があり、続けて平成24年度の学会賞を受賞した2名による受賞講演も行われた。

また、3日間を通して特別講演やシンポジウムの合間に一般演題とポスター発表が組まれていたが、一般演題46題、ポスター発表52題と前年を上回る演題登録があり、実行委員会でもプログラムの作成には苦労したようである。原発事故関連の演題がとて多く、それらのセッションではとても活発な議論が交わされていた。

最後に大会賞の表彰式、次期大会案内、閉会式が開催され、次期大会案内では阪間稔氏（徳島大学）から徳島大学大塚講堂で開催予定の第13回大会についての紹介が行われた。

また、大会賞では最優秀プレゼン賞3名、優秀ポスター賞3名が選出された。

最優秀プレゼン賞：森田直子（長崎大学）、廣井朋子（聖マリアンナ医科大学）、杉浦広幸（福島学院大学）

優秀プレゼン賞：永松知洋（岡山大学）、外間智規（JAEA）、土居亮介（久留米大学）

【以上敬称略】

選考委員長の河野孝央氏（核融合科学研究所）からは「受賞者はこの成果を是非学会誌に発表するように」という通達(?)もあったが、大会長の挨拶をもって3日間の学会は無事終了した。

北海道では第3回に続き2回目の開催となったが、遠い北の大地での開催にもかかわらず、100件近い演題数、250名を超える参加者があり、大盛況であった。また開催中には（大会長も期待した）雪も降り、本州からの参加者には寒いながらも初冬の北海道を満喫できたのではないだろうか。

最後にこの学術大会の運営に携わった大会長の関興一氏、実行委員会の皆様方、並びに関係者各位に深く御礼申し上げます。

（久留米大学 医学部 放射性同位元素施設）